

徳川慶喜と謡曲（一）

一 はじめに

徳川慶喜が謡曲を好み、松本金太郎について稽古したことについては『徳川慶喜公伝』^{〔注1〕}に「宝生流の松本金太郎は、謡曲の御相手として常に召されたり、御好の曲は、景清・鸚鵡小町の如く渋きものにして、頗る巧妙にましましたれど、公は常に謡曲のみは思ふやうにならずと仰せらる。されど同族の人々より成れる月並会には必ず出席し給へるが、薨去の年の春、大倉喜八郎が向島の別邸へ公を御招待申し上げし時、公は熊野論議を謡はれしが、其渋き謡ひ口の巧妙なりしは、後までも思出の種なりと其道の人は言ひき（松本長談話）」とある。但し、これは没後の思い出として書かれたものである。このたび、千葉県松戸市の戸定歴史館所蔵の『徳川慶喜邸日誌』（以下『日誌』）を閲覧・調査する機会を得た。これは、慶喜の静岡住居時代の明治五（一八七二）年から明治四十五（一九一二）年までの、徳川慶喜邸への来訪者と慶喜自身の行動を慶喜邸の使用人が記したものである。長い年月にわたるもので、複数の人が記しているのだが、この来訪者として、静岡時代の明治九（一八七六）年か

ら松本金太郎が頻繁に召されていたことがわかる。本稿では、この『日誌』より慶喜と謡曲との関わりについて述べ、明治期の能楽のシステムについて考えたい。

飯塚恵理人

二 慶喜の静岡住居時代

明治元（一八六八）年から、現存する『日誌』の始まる明治五年までの慶喜の環境を、『徳川慶喜公伝』^{〔注2〕}の「年譜」から特に関係する部分を引用する。

《明治元年》四月四日橋本実梁等江戸城に入りて勅詔を伝宣し、公の死一等を減じ、実効を立つべき五事を命ず。○十一日江戸開城。○同日大慈院を出で、十五日水戸に著し、弘道館に謹慎す。閏四月二十九日三条実美江戸城に入り、田安亀之助に徳川家を相続せしむるの勅詔を伝宣す。五月二十四日三条実美、徳川家を駿河府中に封じ七十万石を賜ふの勅詔を伝宣す。七月十九日弘道館を発して二十三日駿府に著し、宝台院に謹慎す。八月十六日朝彦親王公と通謀して不軌を図るの嫌疑を蒙り、親王宣下及仁孝天皇の養子を抑め、官位を褫ひて芸州藩に幽せらる。

『明治二（一八六九）年』三月六日朝彦王の罪一等を宥して安芸に安置す。九月二十八日謹慎を免ぜらる。十月五日静岡紺屋町元代官屋敷に移る。○二十六日夫人東京を発し、十一月三日静岡に著す。此後永く同棲す。

『明治三（一八七〇）年』閏十月二十日朝彦王を伏見宮に復帰し、尚謹慎せしむ。

『明治四（一八七二）年』七月十四日列藩を廢して悉く県となす。

『明治五（一八七二）年』正月六日從四位に叙せらる。正月六日朝彦王の謹慎を宥して宮号を称せしめ、松平容保・其子喜徳・松平定敬・板倉勝静・永井尚志等の罪を宥す。

となる。

慶喜は明治元年閏四月二十九日に徳川亀之助が徳川家を相続した時点で「隠居」の身分である。明治二年九月二十八日には謹慎を免ぜられているが、慶喜と謀反を企てたと嫌疑を受けていた朝彦王の謹慎が解けるのは明治五年正月六日であり、「隠居」の身とはいえない。まだ慶喜も謀反の嫌疑を受けやすい立場にあったと言える。明治五年正月に從四位となり、明治政府から「華族」としての身分が認められた。現存の『日誌』はこの年から始まっているが、慶喜邸が「隠居所」ではなく、徳川慶喜家という「華族」の邸宅としての機能をこの年から持つことになり、なかば公式な場所としての機能を有するようになったという事情も考えられる。

『日誌』を活用して、静岡時代の慶喜邸を訪れた人について検証した先行研究としては前田匡一郎氏の『慶喜邸を訪れた人々―「徳川慶喜家扶日記」より^(註3)』が挙げられる。（前田氏が『徳川慶喜家扶日記』と呼んでいる書は『徳川慶喜邸日誌』のこと。所蔵の戸定歴史館は本書を『徳川慶喜家扶日記』と呼んでいたが、近年『徳川慶喜邸日誌』と名称を変更した。本稿では、変更後の名称を用いる。）前田氏

により、慶喜邸に出入りした人が具体的に明らかになったが、それを見て分かるのは、一日に入る人は多くても四・五人で大勢を集めることはしていないこと、狩猟等で外出する際の供も四・五人までであることである。表立つことは避け、小人数で出来る趣味を楽しんでいたと考えるべきであろう。能楽師として、慶喜について静岡に移住した者としては、観世流の家元である観世清孝、太鼓方の観世元規などが知られている。しかしながら、観世清孝や観世元規が慶喜邸に出入りした記事は『日誌』には見られない。慶喜が宝生流を好んだという事もあり得るが、屋敷への多人数の来訪は避けたいという意向が大きいように思われる。

松本金太郎は、明治十六（一八八三）年十月十八日の「東京日日新聞」^(註4)に十月二十一日の芝公園地能楽堂での能に出演するという予告記事が載る。これを引用すると、「十月二十一日、於芝公園地能楽堂 午前八時始 能組 三笑（喜多文十郎）、八島（観世清孝）、柏崎（宝生九郎）、黒塚（松本金太郎）、国栖（梅若実）、「狂言」隠笠（大蔵八郎）、今神明（野村与作）、木六駄（三宅庄市）、八島間奈須（鷲権之丞） 一畳金一円 一人限金二十五銭 切符売捌所 能楽堂前 翁家」となる。明治十年代後半は芝能楽堂などで能が催され、東京での能が復興に向かい、地方から能楽師が上京する時期にあたる。表章氏^(註5)によれば、静岡にいた観世清孝は明治八（一八七五）年三月三日に上京した。また同氏は、清孝^(註6)上京の頃には「小鼓の観世新九郎も太鼓の観世元規もほぼ前後して静岡を引き揚げている。帰京の潮時だったのであろう」と、静岡在住の能楽師が明治八年前後から帰郷していたと述べている。松本金太郎は明治十六年前後までは静岡に住んでいたと考えられるので、上京は静岡移住組の中では遅い方に属する。松本金太郎の上京の遅れた理由として、金太郎が慶喜に召されていたことも考えられる。

三 明治九年の松本金太郎

『日誌』より、松本金太郎の明治九（一八七六）年の慶喜邸への来訪記事を挙げると、以下のようになる。（稽古お断りなど、その日に稽古しなかったとする記事は▲をつけた。）

一月（三日間出仕）

廿九日 松本金太郎罷出ル。

三十日 無記事。松本金太郎罷出ル。

三十一日 松本金太郎罷出ル。

二月（二十六日間出仕）

一日 （挿入記事） 松本金太郎罷出ル。

二日 （挿入記事） 松本金太郎罷出ル。

三日 （挿入記事） 松本金太郎罷出ル。

四日 （挿入記事） 松本金太郎罷出ル。

五日 （鉄砲） 帰後、松本金太郎罷出ル。

六日 無記事。松本金太郎罷出ル。

七日 松本金太郎罷出ル。

八日 松本金太郎罷出ル。

九日 松本金太郎罷出ル。

十日 松本金太郎罷出ル。

十一日 松本金太郎罷出ル。

十二日 無記事。松本金太郎罷出ル。

十三日 松本金太郎罷出ル。

十四日 松本金太郎罷出ル。

十五日 無記事。松本金太郎罷出ル。

十六日 （挿入記事） 松本金太郎罷出ル。

十七日

十九日 松本金太郎午後三時より罷出ル。

廿一日 午後一時頃より松本金太郎罷出ル。

廿二日 松本金太郎午後一時出ル。

廿三日 午後六時松本金太郎出ル。

廿四日 午後六時過より松本金太郎罷出ル。

廿五日 午後六時より松本金太郎罷出ル。

廿六日 午後六時より松本金太郎罷出ル。

廿七日 午後一時過松本金太郎罷出ル。

廿八日 午後一時より松本金太郎罷出ル。

廿九日 午後六時より松本金太郎罷出ル。同人へ被下物相渡ス。

三月（二十九日間出仕）

一日 正午松本金太郎罷出。村上御機嫌伺として罷出。御謡相手致し候。

二日 午後六時より松本金太郎罷出。

三日 午後一時松本金太郎罷出、夕時より村上真御謡御相手

二罷出、酒肴之候。

四日 午後六時過より松本金太郎罷出ル。村上真昨日の御礼

として罷出ル。

五日 午後二時松本金太郎罷出。

六日 金太郎出ル。

七日 午後二時より金太郎罷出ル。

八日 午後二時金太郎罷出ル。

九日 午前十時より松本金太郎罷出ル。

十日 午後六時より松本金太郎罷出ル。

十一日 金太郎出ル。

十二日 午後六時より金太郎罷出ル。

十三日 六時より松本金太郎罷出ル。

十四日 松本金太郎午後六時過より罷出ル。

十五日 金太郎出ル。

十六日 午後一時より松本金太郎罷出ル。

十七日 午後一時より松本金太郎罷出ル。

十八日 午後二時より金太郎罷出ル。

十九日 午後一時より松本金太郎罷出ル。

廿一日 金太郎出ル。

廿二日 金太郎出ル。

廿三日 午後二時より金太郎罷出ル。

廿四日 午後一時過金太郎出ル。

廿五日 金太郎出ル。

廿六日 午後一時より金太郎罷出ル。

廿七日 午後一時過より金太郎罷出ル。

廿八日 午後六時より金太郎罷出ル。

廿九日 午後六時金太郎出ル。

三十一日 金太郎出ル。

四月（二十七日間出仕）

一日 金太郎出ル。

二日 金太郎出ル。

三日 午後六時より金太郎出ル。

四日 十二時より松本金太郎罷出ル。午後六時村上真御謡御

相手として罷出ル。

五日 五時過より金太郎罷出ル。

六日 午後二時より金太郎罷出。

七日 午後二時より金太郎出ル。

八日 午後十二時金太郎出ル。

九日 午後六時過より金太郎罷出。

十日 六時過より金太郎罷出ル。

十二日 午後六時より松本金太郎罷出ル。

十三日 午後二時過より松本金太郎罷出ル。

十四日 午後金太郎出ル。

十五日 十二時過金太郎出ル。

十六日 十二時金太郎罷出ル。

十七日 二時金太郎出ル。

十八日 宇田川・村上・松本御謡相手二出。

十九日 六時より金太郎出ル。

廿一日 一時過金太郎罷出ル。

廿二日 午前金太郎出ル。

廿三日 午後二時過より金太郎出ル。

廿四日 午後六時過より松本金太郎罷出ル。

廿五日 金太郎十二時頃出ル。

廿六日 十二時過より松本金太郎罷出ル。

廿七日 金太郎午後一時過罷出。

廿八日 六時金太郎出ル。

廿九日 六時金太郎出ル。

五月（二十九日間出仕）

一日 六時金太郎出ル。

二日 午後六時より金太郎罷出ル。

三日 六時より金太郎出ル。

四日 午後一時過より松本金太郎罷出。

五日 金太郎六時頃出ル。

六日 金太郎出ル。

七日 午後一時前金太郎罷出村上真御謡御相手為出候事。

八日 六時過金太郎出。

九日 六時金太郎出。

十日 午後一時過松本金太郎罷出。

十一日 午後六時過金太郎出ル。
 十二日 午後七時頃より金太郎罷出ル。
 十三日 午後六時に松本金太郎罷出ル。
 十四日 松本金太郎午後六時出ル。
 十五日 村上真御機嫌伺ニ罷出ル。午後一時前金太郎罷出ル。
 真御謠御相手致候事。

十六日 午後六時過より松本金太郎罷出。
 十七日 十二時過金太郎出ル。
 十八日 午後六時過より金太郎罷出ル。
 十九日 十二時過金太郎出ル。
 廿日 七時過より金太郎罷出。
 廿一日 午後一時より金太郎・真・平七御謠御相手ニ出ル。
 廿二日 午後一時過より金太郎出ル。
 廿三日 六時過松本金太郎出ル。
 廿四日 二時過より松本金太郎出ル。
 廿五日 午後一時金太郎出ル。
 廿六日 午後三時過金太郎出ル。
 廿七日 午後一時金太郎出ル。
 廿九日 午後一時半金太郎罷出ル。
 三十一日 午前十時過より村上・松本御謠御相手ニ出ル。
 六月(十八日間出仕)
 一日 午後六時過金太郎罷出ル。
 二日 七時金太郎出ル。
 三日 午後二時頃より金太郎罷出ル。
 四日 七時金太郎出ル。
 五日 午後一時過より金太郎罷出ル。
 六日 午後二時金太郎出ル。
 七日 午後一時より金太郎罷出ル。

九日 午後一時過より松本金太郎罷出ル。
 十日 午後三時過金太郎出ル。
 十一日 午後一時より金太郎罷出ル。
 十二日 十二時金太郎出ル。
 十六日 午後七時金太郎出ル。
 ▲十七日 午前少々御風氣ニ付、御謠両三日御稽古御見合被為候
 ニ付、此段金太郎方へ小笠より申遣候事。

廿五日 午後三時金太郎出ル。
 廿六日 七時過より金太郎出ル。
 廿七日 七時前より金太郎罷出ル。
 廿八日 七時より金太郎出ル。
 廿九日 金太郎出ル。
 三十日 午後一時過より金太郎出ル。
 七月(二十七日間出仕)
 一日 七時より金太郎出。
 二日 午後六時より金太郎出ル。
 三日 八時過金太郎罷出ル。
 四日 十二時より御謠御相手として村上・宇田川・松本出ル。
 五日 七時過金太郎罷出ル。
 六日 七時過より松本金太郎罷出ル。
 七日 金太郎七時より出ル。
 八日 八時より金太郎出ル。
 九日 午後六時過より松本金太郎罷出ル。
 ▲十日 (御帰館七時過) 金太郎へ断申遣候。
 十一日 七時過より金太郎出ル。
 十二日 午後三時金太郎罷出ル。
 十三日 午後三時過金太郎出ル。
 十四日 七時過より金太郎出ル。

十五日 午前十時過より御謡御相手として宇田川清叟・村上

真・松本金太郎罷出。

十七日 金太郎出ル。

十八日 午後八時より金太郎出ル。

十九日 七時より金太郎出ル。

廿日 午後八時過金太郎罷出ル。

廿一日 午後一時より金太郎罷出ル。

廿二日 金太郎出ル。

廿三日 七時過より金太郎出ル。

廿四日 午後二時過より金太郎罷出ル。

廿五日 金太郎七時より出ル。

廿六日 金太郎出ル。

廿七日 午前六時過、宇田川・平七・村上真・金太郎御謡御相手罷出ル。

廿九日 午後二時過より金太郎出ル。

三十日 七時過金太郎罷出。

八月（二十一日間出仕）

一日 午後三時過より金太郎出ル。

▲二日 御口中痛品二付、金太郎の分御断に相成ル。

三日 午後六時過、金太郎出ル。

四日 午後二時過より金太郎出ル。

▲五日 （川尻行き、帰り九時二十分。）金太郎御断申遣ス。

六日 金太郎へ先月分被下物未被下二付同人へ相渡。三時過

金太郎出ル。

七日 午前九時頃より金太郎出ル。

八日 八時過金太郎罷出ル。

九日 金太郎出ル。

十日 午後六時過より金太郎出ル。

十二日 午前八時頃村上・宇田川・松本御謡御相手二出ル。

十三日 七時過より金太郎出ル。

十四日 午後七時頃より金太郎罷出ル。

十五日 七時過金太郎出ル。

十六日 六時過より金太郎出ル。

十七日 （午後）八時前より金太郎罷出ル。

十八日 七時過、金太郎出ル。

▲十九日 （安倍尻行き）金太郎御断二相成ル。

廿日 午後六時より金太郎罷出ル。

▲廿二日 （川尻 御帰館午後八時過）金太郎まで御断申遣候事。

廿三日 午前八時より御謡御相手として宇田川・平七・村上真・飯室留吉・金太郎罷出候。

廿六日 （午後）七時四十分過金太郎罷出ル。

廿八日 無記事。午後七時頃より金太郎罷出ル。

廿九日 無記事。午後七時過より金太郎罷出ル。

三十一日 午後七時過より金太郎出ル。

九月（十一日間出仕）

一日 午後七時過金太郎罷出ル。

二日 （清水港行 午後）七時過より金太郎罷出ル。

三日 午後七時過より金太郎罷出ル。

▲四日 金太郎御稽古御休二而、同人江御帰館後御側より御酒御肴被下。

五日 午前八時御謡二付、宇田川・松本・飯室・村上出ル。

▲六日 （清水港行き）松本御断二相成ル。

七日 午後七時過金太郎罷出ル。

八日 七時過金太郎出ル。

十日 金太郎出ル。宇田川清叟、過日御漁之肴頂戴之為罷出ル。

十二日	金太郎伺二出ル。	廿六日	金太郎出ル。
十六日	六時過ぎ金太郎出ル。	廿七日	金太郎出ル。
十七日	二時過ぎより金太郎出ル。	廿八日	金太郎出ル。
▲廿一日	金太郎御断ニ相成ル。	廿九日	金太郎出ル。
廿五日	午後五時より金太郎出ル。	三十日	金太郎出ル。
十月(二十四日間出仕)		三十一日	金太郎出ル。
四日	午前七時より御前・奥方様清水へ被為入候。御供金太郎・守茂為三郎・覚庄一郎。御帰館七時過。	十一月(二十七日間出仕)	
五日	午後金太郎出ル。宇田川清叟御機嫌伺出ル。	一日	○左は御謡御相手致ス。
六日	金太郎出ル。		○金太郎出ル。
七日	金太郎出ル。		同人へ被下物渡ス。
八日	金太郎出ル。	二日	金太郎出ル。
九日	午前九時前より酒井閑亭様御入来。并宇田川・飯室・村上・松本四名出ル。	三日	金太郎出ル。
十二日	金太郎出ル。	四日	金太郎出ル。
十三日	金太郎出ル。	五日	御謡講二付、宇田川・村上・飯室・松本出ル。
十四日	(『日誌』頭注…)金太郎出ル。	六日	金太郎出ル。
十五日	午後三時過ぎより金太郎出ル。	七日	金太郎出ル。
十六日	金太郎出ル。	八日	金太郎出ル。
十七日	金太郎出ル。	九日	金太郎出ル。
十八日	午前八時過為御謡講酒井閑亭様御入来。鶏三羽栗実被進御陰様分二御遣御替二御進候。右二付、村上真・飯室・宇田川清叟・松本金太郎出ル。	十日	宇田川清叟・松本金太郎出ル。
廿日	金太郎出ル。	十一日	金太郎出ル。
廿二日	金太郎出ル。	十二日	金太郎出ル。
廿三日	午後二時より金太郎出ル。	十三日	金太郎・真出ル。
廿四日	午後一時金太郎出ル。	十五日	厚様御祝。おひて様御宮参として、少福井社へ御参詣被遊候。御供為三郎・□賀事。右二付、小栗・柏原・茂木・千田・差持・村上・吉川・鶯免・飯室・松本・宇田川、其他故御宝□向口出入町人残人等酒肴被下。昨日の為御礼、小栗・村上・差持・千田・松本・常見・飯室・宇田川・原田・永井與七郎・茂作出ル。池田出
廿五日	金太郎・真、罷出ル。	十六日	

ル。若□出ル。直出ル。

十七日 金太郎出ル。

十八日 五時過金太郎出ル。

十九日 金太郎出ル。

廿日 午後六時頃より金太郎出ル。

廿一日 金太郎出ル。

廿二日 金太郎出ル。

廿三日 金太郎・真出ル。

廿五日 御謡講二付、宇田川・村上・松本・飯室出ル。

廿六日 松本金太郎出ル。

廿八日 金太郎出ル。

廿九日 金太郎出ル。

三十日 金太郎出ル。

十二月（二十五日間出仕）

一日 金太郎出ル。

三日 金太郎出ル。

四日 金太郎出ル。

五日 真・金太郎出ル。

六日 金太郎出ル。

七日 金太郎出ル。

八日 午前八時より近村へ被為人。御供猛雄・金太郎・喜和

三・久蔵・梅吉外二壱人。

九日 金太郎出ル。

十日 金太郎出ル。直出ル。

十一日 金太郎出ル。

十三日 金太郎出ル。明十四日謡講のこと宇田川へ申遣ス。

十四日 今日御謡講二付、溝口罷出ル。宇田川・松本・村上・

飯室罷出ル。

十五日 金太郎出ル。

十六日 金太郎出ル。

十七日 御謡講二付、溝口・村上・宇田川・飯室・松本出ル。

十九日 金太郎出ル。

廿日 金太郎出ル。

廿一日 金太郎出ル。

廿二日 金太郎出ル。

廿三日 金太郎出ル。

廿四日 金太郎出ル。

廿五日 御謡講二付、宇田川・村上・飯室・松本出ル。○前四

人歳暮被下物無し。

廿六日 金太郎出ル。

廿七日 金太郎出ル。

廿九日 金太郎出ル。

松本金太郎は明治九年の一年間に、都合二百六十七日間出仕している。謡曲の相手が主であるが、外出の供などを勤める時もあった。明治九年の慶喜の身辺の記事を『徳川慶喜公伝』の「年譜」より記すと、「七月十七日四女筆子君生る。」という記事のみであり、慶喜個人には比較的穏やかな時期であったと考えてよいだろう。この時期、慶喜が謡曲に非常に熱心だったのは確かであり、この傾向は翌年も続く。慶喜はのめり込む趣味が次々替わったため、召されなくなると間があくのだが、松本金太郎との交流は慶喜が上京した明治三十（一八九七）年以降も断続的に続く。このことに関しては、別稿を期したい。

注

（注1）『徳川慶喜公伝 四』 洪沢栄一著 東洋文庫（107） 平凡社 昭和四三

年一月発行 三二五―三二六頁

(注2) 『徳川慶喜公伝 附録第二年譜』 渋沢栄一著 龍門社刊 大正六年発行 九―四八頁

(注3) 『慶喜邸を訪れた人々―徳川慶喜家扶日記―より』 前田匡一郎著 衣出版 平成十五年十月発行

(注4) 『明治の能楽(一)』 倉田喜弘編著 国立能楽堂調査養成課編集 日本芸術文化振興会 平成六年三月発行 二六六頁

(注5) 「34親世清孝の帰京の年月日」 『親世流史参究』 表章著 檜書店 平成二〇年二月発行 五二三―五二六頁

(注6) 同注5 四一七頁

(注7) 同注2 四〇頁

補記

貴重な『徳川慶喜邸日誌』の閲覧・調査を許可してくださいました松戸市戸定歴史館(〒二七―〇〇九二 千葉県松戸市松戸七一四―一)と、同館学芸員の齋藤洋一先生に心より感謝致します。また、『徳川慶喜邸日誌』の存在と価値を教えて下さいました長唄杵屋三太郎家家元杵屋三太郎先生に心より感謝申し上げます。本稿は、平成二十一年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金採択研究課題「近代芸能史の研究」による成果の一部となります。

いづつか・えりと／文化情報学部教授
E-mail: erito@sugiyama-u.ac.jp